

六月吉祥日 千切屋總左衛門」とある。遺憾ながら題辭は判讀し得ぬが、屏風の古き包装に「保津川圖」とありし由、題辭も恐らくかくあつたであらう、今傳へて保津川圖と云ふはこれによるものと思ふ。

沈天驥筆栢喜雀松鷹圖

解説

東京 武内金平氏藏

沈天驥は支那の畫史畫錄類にもその名を見出すことが甚だ罕であつて繼に歴代畫史彙傳が新市鎮續志なる書を引いて「銓從子得其畫法傳世者少」と云つてゐるのを稍具體的な記述とする。然るに清朝には沈銓なる畫家が二名あつて、享保年間長崎に渡來せる南蘋沈銓は我國に於てこそ特に有名であるが、本國に於て二人の沈銓の何れが果して畫名高かりしかは些か疑問とすべく、單に銓の從子とのみ云ふて直ちに南蘋の縁戚と考ふることは疑なきを得ない。尤も畫史彙傳は初に南蘋沈銓を擧げ、次に沈天驥を擧げ、最後に直隸天津人青來道人と號

する別の沈銓を擧げてゐるので、この序位によつても大體天驥を南蘋の從子と見て差支ないようであるが、更に云はゞ、南蘋沈銓は吳興双林鎮の人、吳興は今の浙江省湖州の古名であつて、清代にはその管する所双林鎮、新市鎮をも含み、今の湖州は即ちその縣治の所在地であつた。一方沈天驥の郷貫に關しては桑名鐵城氏所藏受天百祿圖軸の款記に浙西駕千天驥畫とある由であり、原田謙次郎氏日本見在支那畫目錄による本圖軸所用の印記に吳興邨驥邨は沈と同字なりとあり、更に其名新市鎮續志に出ると云ふによつて初めて南蘋、天驥共に吳興の出であり、その親戚關係も確定し得るのである。而して所用印記「吳興邨驥」「雲亭」「石耕」等に從つて思ふに此人諱は驥、字天驥號駕千、別に雲亭、又石耕と號した人であつて畫史彙傳に沈天驥として錄出せらるゝは些か他の體例に倣はぬ嫌があるが、或は特に字を以て行はれた人でもあつたかと思はれる。

沈天驥筆栢喜雀圖印記

同印記

沈天驥筆松鷹圖記

この圖は設色輕淡、濃淡の墨を主調とし、沈銓の法を

沈天驤筆
松鷹圖

東京 竹內金平氏藏

受けたりと云へ、勁抜の點に於て一步を進め、その逆る所些か躁氣を伴ふの感なき能はざるも、寫象は流石に正鵠を失はざるものがある。歎に云ふ乾隆丙戌はその三十一年、我が明和三年に當る。即ち南蘋來朝の年より三十五年を往過してゐる。南蘋の姪としてこの年差あるは當然なるべく、畫風より見て蚤くも壯歳を過ぎたる頃以後の作品とすべきであらう。

飛天像 解説

東京 瀬津伊之助氏藏

像容から察するに略丈六又は二丈程の佛像の光背に付せられた飛天の一であらう。固より光背の一部分に過ぎぬものであるから、獨立して觀察するときは多分に扁平觀を感ずるを免れず、衣褶の如きも決して精刻といふを得ざるも、背部に至るまで刻明に刻出してともかくも全像としての形式を具備してゐることは當時の工匠の仕事の精到なることを物語つてゐるものであらう。今左足を裏む裳の端と、領巾の體に纏る部分以外とを失つて、その缺失部分に拙劣な補修が施されてゐるが、幸に容顏體軀略完好、漆箔は諸處剥落してゐるけれども仄かなる金色を留める個所も多く、豊かな表情を湛へて古致掬すべきものがある。溫雅秀麗な作風より見て藤原時代も末期とは下らざる一秀作と鑑せられる。佛光を鋳るに飛天を以てすることは古代よりこの例必ずしも乏しくはないが、所謂飛天光は、定朝の創始と云ふべからざるも少くも定朝以來その形式の整備と流行と見たことは長秋記長承三年四月十日の條に鳥羽勝光明院造立の準備を記した文中「定朝以來近代吉佛皆作飛天光云々」とあるによつても推知せらるゝであらう。本像は果して何れの寺、何れの佛の光背を鋳つてゐたものであらうか。近時之が世に現れた時は正確なる所傳を失つて鳳凰堂雲中供養佛の一體と傳へられてゐるが、その妄なることは現存雲中供養佛との比較によつて自ら

明であつて多言を要しない。但し假令鳳凰堂には非ずとしても他の佛殿楯間に懸列せらるゝ所謂雲中供養佛中の一體かとも考へられないではないが、その遺例の比較的乏しきより、猶飛天光中の一體と認むべきであらう。藤朝後半の造寺造像の盛と、その亡佚の夥しきを記録の上に讀むものは、この一小像が、果して何れの寺、何れの佛に附屬してゐたかを穿鑿することの大海に一粟を探るに等しきを嘆くよりも、寧ろこの可憐なる一小像が不思議にも湮滅を免れて、さ、やかながら當時の榮華を物語る好個の記念となりしことを喜ぶであらう。

美術研究所時報

美術懇話會は六月廿四日美術研究所に於て開催、武内金平その他諸氏の蒐藏に係る、古代エデプト、ギリシヤ、ローマ等の小彫刻工藝品を展觀し、兒島喜久雄氏の講演を聴いた。

寄贈圖書

國史學會 昭和十三年度

蓬春畫集

博物館陳列品圖鑑 十三輯

海東諸國紀

Rowland, Jr. Benjamin; Buddha and the Sun

Pacific Cultures. Department of Fine Arts

Rowland, Jr. Benjamin

國際文化振興會

帝室博物館

Catalogue of the Imperial Treasures in the Shōshin